

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2 調査の概要

- (1) 調査実施日 令和4年4月19日(火)
- (2) 調査実施校及び調査学年・児童生徒数  
小学校9校(第6学年 338名) 中学校4校(第3学年 286名)
- (3) 調査の内容
  - ① 教科に関する調査(国語、算数・数学、理科)
  - ② 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

3 教科に関する調査結果の概要

<小学校 平均正答率>

	国語	算数	理科
伊予市	67	63	64
愛媛県	66	64	64
全国	65.6	63.2	63.3

<中学校 平均正答率>

	国語	算数	理科
伊予市	71	53	51
愛媛県	69	51	49
全国	69	51.4	49.3

<小学校>

- 国語のほとんどの項目で全国平均を上回っている。普段の学習の積み重ねが今回の成果につながったと思われる。しかし、「書くこと」については、平均を若干下回っており、「自分の文章のよいところを見付ける」問題においては、無回答率も高い。伝える内容を明確にしたり、自分の文章の特徴に気付いたりできるよう、文章を作成後、自分が書いた目的や意図を相手に伝えたり、感想や意見を具体的に伝えあったりする経験を重ねる必要がある。
- 算数においては、「思考・判断・表現」の項目は全国平均を上回っているものの、「知識・技能」の項目は下回っている。その中でも「変化と関係(割合)」の正答率が特に低い。生活経験が想起できるような日常的な場面と課題を対応させながら考察し、実感の伴う課題解決ができる学習活動の積み重ねが求められる。
- 理科においては、「知識・技能」は全校平均を上回っているが、「思考・判断・表現」については平均を下回っている。実験器具の名称や昆虫の体のつくりなど知識を問われる問題では高い正答率を上げている一方で、結果を見通して問題解決までの道筋を構想したり、結果を分析して自分の考えを持ったりすることに課題がある。実験で得た数値や内容を根拠として表現する場を設定し、根拠を明らかにして妥当な考えを作り出す学習活動の積み重ねが必要である。

<中学校>

- 国語では、ほとんどの項目が全国平均を上回っており、良好な結果となっているが「話す・聞く」領域の「自分の考えが伝わるように表現を工夫して話す」ことに課題がある。様々な工夫の認識、効果の確認、相互に助言などを通じて、目的意識をもって表現したり、自分の表現を振り返ったりする場の設定が必要である。
- 数学科では、全ての項目において全国平均を上回っており、良好な結果となっている。どの教科にも共通することではあるが、回答方法が記述式になると、正答率が下がり、無回答率が上がる。習得した「知識・技能」を生かすためにも、すでに解決した課題を振り返って説明したり、データから読み取ったことを根拠を明確にして説明したりする経験を重ねることで、「知識・技能」を活用して自分の考えをまとめ表現する力が定着すると考えられる。
- 理科においても、ほとんどの項目で全国平均を上回っており、他教科と比較して無回答率も低かった。しかし、実験計画の見直しが求められる問いにおいては、無回答率が高かった。実験の目的を明確にする、結果の見通しを立てる、結果を基に考察する、といった学習活動の流れを定着させ、考察したことを練り合う場の設定により、自分の考えの確認や修正につなげることが必要である。

【平均無解答率（答えを書かなかった児童生徒の割合）】（低い方がよい）

<小学校調査>

	国語	算数	理科
伊予市	3.2	3.2	2.4
愛媛県	3.4	2.2	2.1
全国	5.7	3.5	3.6

<中学校調査>

	国語	数学	理科
伊予市	3.2	8.6	2.1
愛媛県	3.8	9.5	2.8
全国	4.2	10.8	3.4

- 本市の平均無解答率を全国と比べると、小中学校とも良好な傾向である。質問紙「解答を文章で書く問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか。」の問いでも、小中学校とも8割を超える児童生徒が「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と答えている。問題に粘り強く取り組もうとする態度が見られる。

4 質問紙調査結果の概要

<小学校>

- 「夢や目標がある」「平日の読書時間」「平日のゲーム利用時間」「地域行事への参加」「今回のテストにおいて最後まで解答しようと努めた」などの項目において全国と比べて良好な結果である。
- 「失敗を恐れず挑戦」「定刻に起床・就寝・朝食の摂取」「主体的な課題解決」などの項目において、全国と比べて低い傾向がある。

<中学校>

- 「夢や目標がある」「学校が楽しい」「地域行事への参加」「教科学習の必要性の実感」「今回のテストにおいて最後まで解答しようと努めた」などの項目において、全国と比べて良好な結果である。
- 「失敗を恐れず挑戦」「定刻に就寝・朝食の摂取」「平日の学習時間(1時間以上)」決めたことをやり遂げる」などの項目において、全国と比べて低い傾向がある。

- 5 クロス集計から (※クロス集計とは：二つ以上の質問項目を掛け合わせた集計)  
小・中学校とも共通して、正答率に顕著な違いがみられた質問項目と各正答率

<朝食の摂取>

	肯定的回答	否定的回答
小学校	64.1	44
中学校	58.8	44.2

<定刻に就寝>

	肯定的回答	否定的回答
小学校	67.5	55.3
中学校	58.2	55.9

<平日のゲーム利用>

	1時間以下	3時間以上
小学校	71	56.6
中学校	62.3	52.9

<平日の動画視聴>

	1時間以下	3時間以上
小学校	68.1	52.1
中学校	61.1	52.6

<計画的な学習>

	肯定的回答	否定的回答
小学校	67.2	57.7
中学校	61.8	54.4

<家庭学習時間(平日)>

	2時間以上	30分~2時間	30分以下
小学校	61.9	65.7	42.7
中学校	57.8	59.8	48.1

<読書時間(平日)>

	30分以上	30分以下
小学校	68.6	60.7
中学校	61.2	56.6

<考えをまとめる機会の実感>

	肯定的回答	否定的回答
小学校	67.9	55.7
中学校	62.3	51

<振り返りの機会の実感>

	肯定的回答	否定的回答
小学校	68.2	55.9
中学校	63.2	45.7

- よりよい生活習慣の定着が、学力定着・向上の一助となっている。
- 限られた時間をどう使うかで、正答率が大きく変わっている。
- 学習時間の長さだけでなく、その内容が大切であることが見てとれる。個に応じた学習方法・学習内容の提供・支援が求められている。
- 学力調査の結果、児童生徒の質問紙調査の両方で、学力向上のためには考えをまとめたり、学習を振り返ったりする機会の設定の重要性が見えた。授業の中にそういう時間を位置付けたり、課題の回答方法の工夫をしたりして、まとめる、振り返る場面を設定する必要がある。

## 5 今後の取組について

この調査結果は、児童生徒の学力の一部であり、全ての学力を調査しているものではありません。各学校から、学校の結果や今後の取組などが示されていることとしますが、学校と家庭の連携の下、学習状況の改善を図っていくことが大切であると考えます。

また、伊予市では平成25年度から「伊予市立学校の教育力向上推進委員会」を設置し、伊予市児童生徒の学習状況に関する課題や今後の取組について協議しています。ここでは、基礎・基本の定着、小中学校（小学校同士、中学校同士、中学校区の小中学校）における連携、これまでの実践とICTの最適な組合せを含めた学習指導の充実と授業改善、家庭との連携の強化などが取組の課題としてあげられています。今後も、市と学校と協力して学力向上の推進に努めてまいりたいと思います。

## 6 備考

愛媛県教育委員会のホームページにも県や市町の結果の概要が紹介されています。

(<http://ehime-c.esnet.ed.jp>)